

論文

16世紀ポトシとアルトペルーインディオ
共同体の変容

——チュクイート地方の場合を中心に——

Potosí y los cambios de la comunidad
indígena del Alto Perú en el siglo XVI:
el caso de la Provincia de Chucuito

真鍋 周三*

Shuzo Manabe

Sumario

Desde la publicación de la *Visita hecha a la Provincia de Chucuito por Garcí Diez de San Miguel en el año 1567* (1964), los estudios sobre la provincia de Chucuito y sobre la vida material de la región del altiplano del Titicaca se han multiplicado. Esta monografía indaga los cambios de la comunidad indígena bajo la dependencia de la Villa Imperial de Potosí, que tenía origen en el abastecimiento a la minas de Potosí y en la mita que proveían a demandas de los mineros allí. En 1559, el tributo en dinero de esta provincia fue elevado de 2 mil a 18 mil pesos. El número de los mitayos de Potosí para pagar esta suma se elevó a quinientos. El trabajo de los mitayos de Potosí no fue suficiente. Para pagar la diferencia, los caciques alquilaron indios a los españoles para que asegurasen el transporte de mercancías de Chucuito a Cuzco y de Cuzco a Potosí. Es cierto que estas mitas fueron herencias de la época

* 青山学院大学大学院博士課程(歴史学)

de los incas, pero ahora agravaban más que antes a la comunidad indígena de esta provincia que quedaba en la ruta de Cuzco a Potosí. También había otra mita: la de los tambos. Sin embargo, según la tasa fijada por el virrey Toledo hacia 1574, fue elevada a 80 mil pesos por año. Por otro lado, después de la reconstitución de la mita de Potosí por Toledo en la década de 1570 él mandó que fueran cada año 2,200 indios de tasa en esta región. Por lo mismo, estas explotaciones destruían la estructura socioeconómica de esta provincia, caracterizada por la combinación de dos principios: reciprocidad y redistribución.

〈序〉

16世紀新大陸におけるスペインの活動目的は、銀に代表される富の獲得であって、その最大の中心地の一つが1545年に発見されたポトシ銀山であったことはよく知られている通りである。そしてまた、ポトシが、とほうもない富を生み出して、重商主義ヨーロッパにおける資本蓄積に関与したことは周知のところである⁽¹⁾。このポトシからの富は、その周辺部にすでに存在していた社会的に組織された労働力と物資の供給を通じて生み出されたものである。従って、ポトシが空前のブームをよび始めるや、ポトシは、その周辺部にあったアンデス社会の伝統的共同体を急激に搾取・収奪のシステムに編入していった。

本稿は、(1)鉱山の労働力や物資の需要の高まりが、いかなる必然性をもって共同体に対する収奪の形態を規定したのか、(2)また、周辺部社会の歴史的特質が、その収奪形態をいかなる必然性をもって再規定したのか、というこの二つの視点から、土着共同体社会の変容の一局面を、特にインディオ人口の密集が相対的に最も高い地域の一つであったチュクィート地方(*la Provincia de Chuquito*)の場合について、実証的に明らかにすることを目的とする。

構成については、I.「ポトシへの物資供給」では、鉱山の物資調達面での共同体に対する依存を、II.「ポトシ銀山のミタ制」では、労働力調達とそのシステムの特異性を扱う。そして、III.「チュクィート地方におけるインディオ共同体の変容」では、共同体が征服される前後の社会、生産、所有、貢納等の面での比較を試みることにより、ポトシへ従属化してゆく過程のなかで、伝統的共

同体の歴史的特質が、その収奪形態を再規定していった点を明らかにする。Ⅳ。「カシケの社会的立場の変化と平民層の抵抗」では、カシケ層の動向と平民の抵抗を、ポトシとの関係において明らかにする。

I. ポトシへの物資供給

ポトシ銀山は、アルトペルー (Alto Perú) の高地 (海拔 4000 メートル以上) に位置し、気候は寒冷で、周囲 6 レグア (約 34 キロ・メートル) は完全に不毛の土地であった。ポトシの人口は、1572 年で約 12 万人、1610 年頃には約 16 万人に達し、新大陸で最大の人口を擁する都市となっていた⁽²⁾。

1. 太平洋岸及びラプラタ川コース経由による物資供給

太平洋岸経由でポトシへ入る物資のうちスペインやメキシコ方面からのものは、1542 年にエンコミエンダへの規制を定めた「新法」に対する反乱を鎮圧 (1547 年) したのちに生じた物資不足を契機にして、流入し始めた。また、絹を中心としたマニラ・ガレー船による東洋からのものは、1570 年代以降、パナマでヨーロッパ商品と合流して太平洋岸を南下し、アレキパに近い海岸又はイロ (Ilo) 港経由で、陸路アンデスを横断してアルティプラノ (Altiplano、ペルー南部高原のアンデスが最も幅広くなった所に広がる寒冷な草原地帯) に入り、ティティカカ湖西岸のチュクィート地方を通してポトシへ運ばれた⁽³⁾。

一方、ラプラタ川経由で密貿易を主とする海外からの供給 (ブラジルを含む) が本格化したのは 1580 年代以降と考えられる⁽⁴⁾。

これらの太平洋岸及びラプラタ川経由によるポトシへの供給品目は、アルサンス・オルスーア・イ・ベラ (Bartolomé Arzáns de Orsúa y Vela) が示す通りであって⁽⁵⁾、それを検討すると、遠大な輸送距離にも拘らず、大半がポトシ市場で最大限の利潤をあげることができた奢侈品や黒人奴隷 (ポトシでは家内用) からなっていたことが明らかとなる。

2. ポトシ周辺地域からの物資供給

ポトシの開発が始まるや、数年を出ずして、まず、アルティプラノを基軸と

して、多くの物資や人、そして、クスコやアレキパからの大商隊が定期的に動き始めた。一方、銀5分の1税(*quinto real*)を本国へ送るために、副王庁も早くから道路網の開発、橋梁の建設に力を入れ、1555年にはリマ〜ポトシ間の道路が整備され、1570年代までには、水銀を導入するためにアリカ(Arica)へのルートも開かれていた。特に、リマからクスコを通り、アルティプラノを抜けてポトシへ到る道路は、スペインでは「銀の道」(*el camino de plata*)とよばれ、アンデスでは「幹線道」(*el camino real*)として知られるようになっていた⁽⁶⁾。ポトシへの主な物資供給地は、インディオ人口の密集したアルティプラノであり、その品目は、リャマなどの家畜とその産物(役畜、食肉、織物・衣類)やジャガイモ(保存食糧としてのチューニョ *chuño* の原料)やキノア(*quinoa*)であった。また、穀物(トウモロコシ、小麦)や、くだもの・野菜類、そして砂糖などを供給していた地方は、コスタ(*costa*, 海岸部)とアンデス東部斜面等の盆地部(*el valle*)——コチャバンバ(Cochabamba)、チャルカス(Charcas)、タリハ(Tarija)他——であった。ポトシ周辺地域からの供給物資についての詳細な品目や、その供給地の内わけは、1603年のヒメネス・デ・エスパダ(Jiménez de Espada)の記録が明らかにしているところである⁽⁷⁾。それを検討してみると、大半が生活必需物資であったことが分る。よって、ポトシは、鉱山を稼働させるのに必要な物資の大半を、先に示した太平洋岸及びラプラタ川のコースからのそれだけではなく、周辺地域に依存していたといえる。そして、このことは、ポトシ銀山の物資需要の高まりが、輸送の問題と相まって、周辺部の伝統的土着共同体をかなり圧迫していたであろうことを想像させる。

II. ポトシ銀山のミタ制

1. ポトシのミタ徴集規模の変化

16世紀にポトシ銀山の強制労働システムであった鉱山ミタ(*mita*)⁽⁸⁾の原住民徴集の規模は、1570年代初頭の第5代副王トレド(Francisco de Toledo, 在位1569~1581)によるスペイン王室側からの「ミタ掌握・再編」政策を契機として変化しており、従って、その前後に分けて検討する必要がある。

(1) 王室による「ミタ掌握・再編」以前

1547年頃から、シルバー・ラッシュが始まるや、ポトシは、発見後直ちに関心を寄せてきた近隣のエンコメンデーロはもとより、スペイン王室を中心に、各地から殺到してきたスペイン人達のあくなき利益追求的となった。1550年代に入ると、王室による銀5分の1税徴収に力が入られ始めたこともあって、高地の厳しい自然条件にも拘らず、ポトシ銀山の開発は急ピッチで進められることになった⁽⁹⁾。そして、その労働力は総て周囲のエンコミエンダや、インカ時代から開発されていた近くのポルコ(Porco)銀山などからの住民の調達に依存していた⁽¹⁰⁾。その際、スペイン人支配層はカシケ(cacique)を仲介として、共同体インディオをポトシ銀山へ徴集し、強制労働に従事させた。この方式は、すでに知られているように、インカ時代からのミタの制度に基づいたものであった⁽¹¹⁾。ポトシから25レグア(約140キロ・メートル)東方に位置し、気候の良いチュキサカ(Chuquisaca, 現在のスークレ)に、ポトシの管理を主要な目的としたチャルカスのアウディエンシア(la Audiencia de Charcas)が設立された1559年頃になると、ミタの徴集範囲は主としてアルティプラノに沿って拡大してゆき、ポトシはかなり遠方からも膨大な人口を引き出すようになっていた⁽¹²⁾。ところが、このような開発が進められた結果、1560年代になると、鉱石の銀含有量が著しく低下し、しかも、地表から採掘現場までの距離が長くなったため、鉱石搬出が困難になっていた。そのため、鉱内での事故や災害の頻度が高くなったり、逃亡者が増加し始めたりして、近在のインディオ労働力の消耗が激しくなった⁽¹³⁾。そして、その結果、第1表が示す如く、銀5分の1税収入の停滞を招いた。

(2) 「ミタ掌握・再編」以降

副王トレドは国庫収入の停滞を打開するため、1570年代初期に水銀アマルガム法とワンカベリカ(Huancavelica)からの水銀輸送制度の確立を通じてなされた精錬部門の改良を試みるとともに、鉱山労働力を定期的に確保しさらに増大するための対策として、レドクシオン(reducción, 分散して居住していたインディオを、近くのスペイン人支配領域へ強制定住させること)を行なうことによって、周辺部のインディオ人口を把握した後、北はクスコから、南はタリハへ到るまでミタ徴集範囲を拡大した⁽¹⁴⁾。そして、1575年まで実験を試み

た後、1576年からしばらくは、1回の総徴集数は1万3500人(18~50歳の成年男子)となった⁽¹⁵⁾。これは、4500人ずつ3グループに編成され、各グループは1日8時間労働で1週間ずつ働かされた。また、労働期間については、鉱山部門(採鉱・搬出)に4カ月、精錬部門に2カ月の合計6カ月とされた⁽¹⁶⁾。よって、1万3500人は、半年毎に徴集されたことになる。そして、1578年までには、この一括徴集と労働期間及び時間帯は改変されていった。従来の6カ月毎の1万3500人が、1年毎になり、その1/3の人数(4500人)が4カ月毎に徴集される仕組みになった。また、労働期間は4カ月、労働時間は1日につき8時間となり、毎日4500人のうちの1/3(1500人)が3交替で終日労働に従事した⁽¹⁷⁾。1590年代をみると、ミタヨ(mitayo、ミタ労働者)1人当りの1日の労働時間は12時間に延び(従来の3交替制は2交替制へ変化)、交替時間削減のために一度鉱内へ入れられると、1週間は地下へ釘づけにされることになった⁽¹⁸⁾。

1585年段階でのミタ徴集地域とその規模は、ルイス・カポーチェ(Luis Capoche)の記録に基づけば、第2表の如くとなる。これを検討すると、ミタ徴集の主体となったのはチュクィート地方をはじめとするアルティプラノのインディオ密集地であったことがわかる。

2. ポトシ・ミタヨの労働状態

スペイン王室による「ミタ掌握・再編」の効果は、第1表が示すように、1570年代後半以降の5分の1税の上昇に反映している。しかし、こうした発展があった一方では、鉱脈を掘り進むに従い鉱質が悪化していったから、水銀アマルガム法導入等の精錬部門での改良も、銀含有量の大幅な低下を招かざるをえなかった。従って、鉱山採掘による利益を旨とした人々にとってみれば、鉱石の絶対量を一層多く確保することが必至となった⁽¹⁹⁾。そこで、1578年以降になると、ミタヨの絶対人数はほぼ一定していたから、ミタヨの労働を、銀鉱石確保の労働部門である鉱内での採掘、搬出部門に集中し始めるようになった。また、採掘現場がますます深くなるにつれて、搬出作業は困難さを増したにも拘らず、あくまでも鉱内での労働集約性の向上が目的とされたために鉱内労働は虐待と悲惨の限りを尽くすものとなっていった。この点については、ホ

第1表 16世紀ポトシの銀5分の1税(quinto real)徴収額の変化
(単位—1万ペソ, pesos fuertes)

Lamberto de Sierra, *op. cit.*, pp. 170-184. より作成.



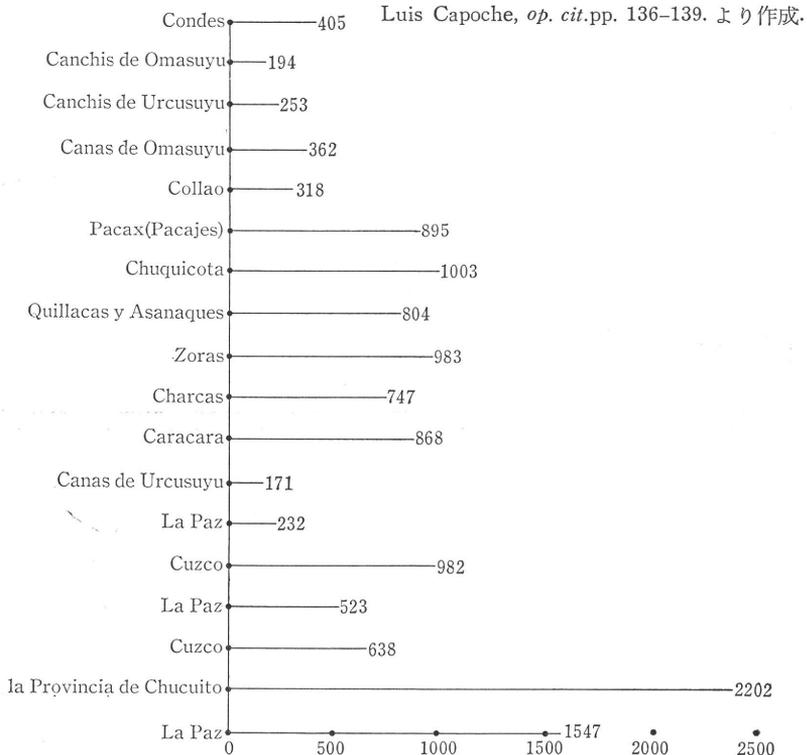
セ・デ・アコスタ (José de Acosta) の記録その他が示すところである⁽²⁰⁾。

次に、1人のミタヨの1日分俸給額は4レアル(reales)であって、これは食費さえ十分に賄えない額であった⁽²¹⁾。また、ミタヨは貢納税(tributo)や教会10分の1税(diezmio)を免除されたわけではなく、その額も別に稼がねばならなかった⁽²²⁾。さらに、鉱石搬出に課せられたノルマが達成できないと罰金を課せられたり⁽²³⁾、ポトシの物価が高騰していたことなどから、多くのミタヨは一度ポトシへ徴集されるや、鉱山主等の債務奴隷のような状況に陥った⁽²⁴⁾。

Ⅲ. チュクイート地方におけるインディオ共同体の変容

これまでに考察したところのポトシ銀山を運営し維持するためになされた物資の供給とミタが、その周辺部地域にいかなる影響をもたらし、さらに征服以前からの伝統的共同体をいかに変容させたかを検討するため、ここでは、周辺地域の中から、16世紀ペルー副王領で、多大な人口を有し、前記の第2表が示している如く、最大のミタ徴集規模を誇ったチュクイート地方の場合をとりあげて、以下に検討しよう。

第2表 1585年、ポトン銀山のミタへのインディオ徴集数(単位一人)



1. スペイン征服以前のチュクイート地方の状態

(1) 社会組織

先インカ期のチュクイート地方は、ルパカ(Lupaca)とよばれ、ティティカカ湖北岸のコヤオ(Collao)と共に、その西岸一帯に強力なカシケ社会を築いており、アトゥンコヤ(Hatuncoya)を首都とするコヤオと覇を競い合っていた。ルパカでは、首都のチュクイート(Chucuito)をはじめ、アコラ(Acora)、イラベ(Ilabe)、フリ(Juli)、ポマタ(Pomata)、ユングヨ(Yunguyo)、セピタ(Zepita)からなる7つのプエブロ(pueblo, 又はカベセラ cabecera, =村落共同体)が、それぞれ数十の小村落共同体を従属させていた⁽²⁵⁾。

現在までに確認されているところでは、インカ時代におけるルパカとコヤオ

の覇権争いは、インカ皇帝ビラコチャ (Viracocha) の時代からであり⁽²⁶⁾、次の皇帝パチャクティ (Pachacuti, 1438—1463) の時代には、パチャクティと結んだルパカの長カリ (Cari) は、コヤオの長サパナ (Zapana) を攻撃し、敗北させた。アトゥンコヤは、ルパカのものとなったが、やがてそのルパカも、パチャクティの支配下に入るようになった⁽²⁷⁾。そして、アルトペルーのほぼ全域がインカの支配下に入ったのは、次の皇帝トゥパック・インカ・ユパンキ (Tupac Inca Yupanqui, 1471—1493) の時代であった⁽²⁸⁾。

次に、ルパカの行政組織についてみると、ルパカのプエブロは、一般のアンデスのそれと同様に、土地の共有を基盤とする親族的血縁集団のアイユ (ayllu, ayllu) とよばれる最小の行政単位が巢状に統合された形となっていた⁽²⁹⁾。ルパカは、典型的なアイマラ族 (Aymara, 他にウル族 Uru, Uro も存在) の集落組織と行政機構をもっていた。アイユの長はプリンシパル (principal, 又はイラカタ, hilacata) とよばれ、アイユが 20 前後集って構成されたのが、プエブロであり、その長がカシケであった⁽³⁰⁾。また、各プエブロ内のアイユは、一般に 2 つのバルシャリダ (parcialidad, 党派系列又は半族) に分かれており、各バルシャリダ毎にカシケがいた。よって、2 つのバルシャリダに分かれたプエブロには、2 人のカシケがいた。そして、この 2 系列の延長たるルパカに君臨したのがカシケ・プリンシパル (cacique principal, 又はマユク, mallk. 以下カシケ・プリンシパルとよぶ) であり、これも 2 人いた。カシケ・プリンシパルは、プエブロの集合体の長として、また、カシケや各アイユに属するすべての共同体インディオの代弁者として機能し、アイユ共同体成員の規制と保護の役割を果たした⁽³¹⁾。ルパカの場合、先インカ期から、2 つのバルシャリダには、上 (アナン, Hanan) と下 (ウリン, Hurin) があり、それぞれを、アナンサヤ (Hansaya), ウリンサヤ (Hurinsaya) とよんだ。アナンサヤはウリンサヤよりも地位が高かったから、アナンサヤのカシケ・プリンシパルが、ウリンサヤのそれを上回る威信をもっていた。また、チュクィートのアナンサヤとウリンサヤは、他の 6 つのプエブロのそれらを凌いだので、結局、チュクィートのアナンサヤのカシケのカリ家が、そのウリンサヤのカシケのクシ (Cusi) 家を凌いで、ルパカを代表する立場にあった⁽³²⁾。

次に、カシケ・プリンシパル、カシケ、プリンシパル、そしてアイユ成員間

の各関係をみると、そこには、一方の経済上の義務が、給付と反対給付という相互交換の形をとって、他方の義務をよびおこすという「互恵」(reciprocidad)の観念と、調整役の中央が、生産物を一度集団から集めてそれから集団に分配するという「再分配」(redistribución)の観念が共同体を支配していたといわれる⁽³³⁾。

さて、こうした地方的ヒエラルキーをもつルパカは、やがて先に記したように、インカの統治権力下に編成された。その際、インカは、その地方ヒエラルキーを崩さなかったばかりか、その独自性を尊重して「互恵」、「再分配」理念を生かしつつ、その根底にある協力の理念に目をつけて、ルパカ社会をタワンティン・スーユ(Tawantinsuyu)帝国に編入した⁽³⁴⁾。そして、この2つの「互恵」と「再分配」の原理が、以下に検討するルパカの「生産」、「所有」、「租税」などに適用されたわけである⁽³⁵⁾。

(2) 生産

ペルーの風土は、西には太平洋岸の乾燥したコスタ、中央は寒冷で乾いたアンデスのシエラ(sierra, 山岳部)、東部は熱帯の湿ったセルバ(selvas, アマゾン川上流の森林部)から成っている。そして、高度差により変化する多様な気候が、この図式に微妙な生態学的変化をもたらしている。山は深い谷によって切り込まれ、その斜面には多様な植生上の変化がみられる。

このうち、ルパカはシエラのアルティプラノを代表する平坦な高原、つまり、ティティカカ湖西岸一帯の標高3800メートルを少し上回るステップ地帯(＝プーナ, puna)に位置していた。寒冷な気候と生産性の低い土壌から、経済基盤の中心は、膨大な数のリヤマなどの家畜であった⁽³⁶⁾。そして、作物は、ジャガイモや他のイモ類、キノア、そしてカニャグア(cañagua)程度に限られていた⁽³⁷⁾。そこで、ルパカは、より農業に適した地域へ、ミティマエス(mitimaes, 移民)を送り込んでおり、また、家畜類産物やチューニョを対価として、不足物資を補完していた。その不足物資とは例えば、コスタのサマ(Sama)やモケグァ(Moquegua)からのトゥモロコシ、そして、東部のラレカハ(Larecaja)やカピノタ(Capinota)からのコカなどであった⁽³⁸⁾。

(3) 所有

インカに編入されたあとのルパカの家畜と土地は、①インカ皇帝のもの、②

インカ太陽神のもの、③共同体のもの、に分けられる。そして、インカ皇帝が共同体に与える恩恵の代りとして、そのアイユの成年男子は、①と②を維持するため、皇帝に対し、労働力を提供した⁽³⁹⁾。次に、③は、さらに、(a)カシケ・プリンシパルのもの、(b)カシケのもの、(c)プリンシパルのもの、(d)アイユ成員のもの、に分けられる。このうち、(a)、(b)、(c)についても、アイユの成年男子は、彼らから与えられる恩恵の代りに、労働力提供の義務を負った⁽⁴⁰⁾。

以下に、インカ皇帝の所有する①と②、そして、③のうちの、カシケ・プリンシパルの(a)、カシケの(b)をとりあげて、それらを土地耕作の面で、クフのプエブロでの占有率を検討したい。

①と②の土地 20 トップ(tupu)は、7つのプエブロ内の2系列のバルシャリダ毎に、運営義務が課せられていた。よって、ルパカ全体では、280 トップ程度の負担であった⁽⁴¹⁾。1 トップとは、納税者1人に割りあてられた畑の広さに等しかったので⁽⁴²⁾、その負担を、征服直前のルパカの納税対象者総数である2万280人⁽⁴³⁾の中で検討すると、占有率は1.4%となり、規模の点では、アイユ成員を圧迫する程のものではなかったと考えられる。

③—(a)の土地について。ルパカを代表するアナンサヤのカシケ・プリンシパルであり、チュクィートのカシケでもあったカリは、チュクィートに70~100 トップ、アコラからセピタまでの6つのプエブロには、それぞれ20 トップを有していた。よって、カリの合計は、190~220 トップとなる。また、ウリンサヤのカシケ・プリンシパルであり、チュクィートのカシケでもあったクンは、チュクィートの50 トップを最高に、他の6つのプエブロでのそれを加えた合計は、87 トップであった⁽⁴⁴⁾。両者の合計は、277~307 トップとなり、これも、インカ皇帝の①と②と大差はなく、納税対象者総数と対比すれば、問題にならなかったと言えよう。

最後に、③—(b)の土地について、イラベのアナンサヤのカシケ、ビルカクティープ(Vilcacutipa)とウリンサヤのカシケ、ガリョマキラ(Gallomaquira)を例にとりあげる。ビルカクティープは、イラベに合計40 トップを⁽⁴⁵⁾、同じく、ガリョマキラは、合計20 トップを有した⁽⁴⁶⁾。両者の合計から、イラベの2人のカシケの土地は、60 トップとなる。これは、イラベの納税対象人口2540人⁽⁴⁷⁾中での占有率が、わずかに約2.4%であったことを示す。これは、他のプ

エプロについての負担をも示唆しているといえよう。

(4) 租税

インカに編入されたあとのルパカに課せられた主な租税は、①家畜の共同飼育と土地の共同耕作、②ミタ、③織物・衣類の租税、であった。これらは、現物納入によったのではなく、すべて、アイヌ成員の労働力に依存した。労働は、アイヌの共同責任で、カシケ層の采配のもとで果たされた。

① 家畜の共同飼育と土地の共同耕作

アイヌ成員は、インカと太陽神の家畜と土地を、それぞれ、共同で飼育、耕作した。とくに、土地は宗教的な歌と踊りに合わせて耕作されたといわれる⁽⁴⁸⁾。産物は、すべてインカ皇帝へ納められたが、皇帝からは、成員の労働期間中、食料や衣類等の必需品が支給され、また、飢饉など共同体の非常時には、インカの倉庫から貯蔵品が再分配された⁽⁴⁹⁾。この関係は、当然カシケ層とアイヌ成員間の場合も同様である⁽⁵⁰⁾。先のイラベのビルカクティーパは、土地を耕作させた時には、種子は自ら提供し、さらにジャガイモ、キノア、ココア、乾燥肉、そして、リャマ・アルパカの毛を十分に支給したといわれる。カシケ層は、アイヌ成員に寛大さを示し、物資を再分配して、威信を保っていたのである⁽⁵¹⁾。

② ミタ

インカ皇帝やカシケ層が、必要に応じて、一定期間、成年男子の一部を公共労働に徴集する制度がミタであった。徴集されて村を空けた者の畑は、代りの者が耕作し、ここでも又、皇帝やカシケ層から食糧と報酬が与えられた。インカ皇帝のミタの規模については明確ではないが、ルパカを圧迫する程のものではなかったといわれる⁽⁵²⁾。

次に、カシケ・プリンシパルの年間ミタ徴集数についてみると、カリはチュクティートから60人、アコラとイラベより合計6人を徴集していた。また、クシはチュクティートから47人、他の6つのプエプロから合計100人を徴集していた⁽⁵³⁾。ルパカのミタ対象者総数(2万280人)の中で、その占有率をみると、1%にも達しなかったことがわかる。最後に、イラベのビルカクティーパが年間25人、ガリョマキラが15人⁽⁵⁴⁾を、それぞれ徴集していたことから、イラベの2人のカシケの年間徴集数は40人となり、イラベ(対象者2540人)での占

有率は1%余りとなり、これらの点からみても、カシケの徴集規模もまた低いものであったと考えられる。

③ 織物・衣類の租税

インカでは、織物は経済的のみならず、宗教的な意味も持っていた。皇帝は、共同体に原料を与え、糸を紡がせ、布を織らせた。この関係はまた、カシケ層とアイユ成員間にも同様に存在した⁽⁵⁵⁾。

2人のカシケ・プリンシパルが7つのプエブロからの労働奉仕によって受けとった年間の衣類は、カリが11~47着、クシが34~36着⁽⁵⁶⁾、と小規模であった。また、ビルカクティーパーバは、イラベのアナンサヤからクンビ(cumbi)製の衣類を、年間に2~3着と、ウリンサヤからアワスカ(auasca)製の衣類を、10~20着織らせており⁽⁵⁷⁾、カシケのそれもまた小規模なものであった。インカ皇帝への奉仕規模は明らかではないが、その規模はカシケ層と大差ないものと推測される。

2. チュクィート地方のポトシへの従属化過程

1533年にインカが征服された後、ルパカヘスペイン人が最初に到着したのは、1534年1月であった。征服によってスペイン王室はインカ皇帝にとって代り、ルパカはプエブロ毎に分断されてチュクィート地方(la Provincia de Chucuito)として、スペインの帝國的支配に包摂され、政治権力は完全にスペイン人の掌中に入った(以下、「チュクィート地方」とよぶ)。同地方では、エンコミエンダ制は敷かれず、王室直轄地としてコレヒドールの統率下におかれた。また、ドミニコ会士たちが送り込まれて⁽⁵⁸⁾、各プエブロには教会が建設され、インカの太陽神崇拜、土着の儀礼、そしてワカ(wak'a)信仰など、アンデスの伝統的宗教が排除されていった⁽⁵⁹⁾。しかし、スペイン人は、共同体の伝統的ヒエラルキーそのものは破壊せず、支配の道具として利用したカシケの威信を通じて、主としてアイユ成員の労働力を用いることにより、経済的収奪をめざしたのである。征服後、カシケはスペイン人の習慣に従って姓を名乗り、教会で教育を受け、スペイン語とカトリックを教え込まれた⁽⁶⁰⁾。

(1) 貢納税(貢租)

征服によって、貨幣の観念が導入され、インディオは法的に、スペイン国王

の臣民とされた。共同体の成年男子(18~50歳)には、インカの租税に代って、貢納税(tributo, 貢租)が課せられることになった。チュクィート地方の貢納税は、多大な人口であったため、最大の規模のものとなり、それらは同地方の行政費、コレヒドール等の役人層の収入源、そして、教会建設とその維持費、僧侶への俸給などに使用され、残りはスペイン王室へ送られた。その徴収は、コレヒドールの命令により、各プエブロのカシケ層(カシケ自身は貢納税を免除された)に義務づけられた⁽⁶¹⁾。

1553年のリマのアウディエンシアの査定によれば、チュクィート地方の貢納税額は、年間2000ペソ(pesos en plata ensayada)の銀、1000着(pieza)の衣類、1000ファネガ(fanega, hanega, 1000ファネガ=55.5キロ・リットル)のトウモロコシ、そして、ポトシで需要があった1200ファネガ(=66.6キロ・リットル)のチューニョと、ポトシへの物資輸送用の90頭のリヤマや騾馬などであった。このうち、2000ペソの銀はポトシへの物資供給の支払いとして共同体に戻された。1000ファネガのトウモロコシのほうは、コスタのサマやモケグア、東部のラレカハなどに求め、それらはクスコからポトシへ到るアルティプラノの幹線道沿いのチュクィート、セビタ、カラコーリョ(Caracollo)などのタンボ(tambo, 宿营地)へ、6カ月毎に半分(500ファネガ)ずつ納められた。また、1200ファネガのチューニョは、6カ月毎に半分(600ファネガ)ずつポトシへ納められた。90頭の家畜はポトシに送られた⁽⁶²⁾。1000ファネガのトウモロコシと1200ファネガのチューニョだけでも、当時1万ペソ以上の価値があり⁽⁶³⁾、また、1000着の衣類は、インカ時代に2人のカシケ・プリンシパルに提供された租税の約15倍に匹敵するものであったことをみれば、これがいかに激しい収奪であったかが理解されよう⁽⁶⁴⁾。これらは、1553年の貢納税が共同体にとって、いかに大きな負担であったかを示すもので、ポトシ発見からわずか8年後に、110レグア(約616キロ・メートル)も遠く離れていたチュクィート地方がいかにポトシに強力に従属させられていたかを示している。

ところが、1559年にチャルカスのアウディエンシアが設立されたのと同時に、チュクィート地方の貢納税額は、極端に引き上げられることになった。即ち、従来の2000ペソの銀は、年間1万8000ペソ(但し、サマを含む8つのプエブロに対して)へと9倍に増額され、さらに、その額の納入に際しては、ポト

ンからアレキパまで自前による運搬を強制された。また、1000着の衣類は銀に換えて納められるべきと決定された⁽⁶⁵⁾。これに対し、共同体側はいかに対応せねばならなかったか。まず、1万8000ペソの支払い手段として、タフのプエブロのカシケは、年間500人のインディオをポトシ銀山のミタに提供して、彼らに支払われる俸給額でそれを穴埋めし、その金額をアレキパに輸送させることを決めた⁽⁶⁶⁾。これは、鉱山労働力提供という形での、ポトシへのチュクィート地方の従属の最初の契機であり、この人数は、その後も定着していたと考えられる⁽⁶⁷⁾。次に、クフのプエブロに分割して割りあてられた1000着の衣類については、各プエブロ成員の自己負担により、長い距離をポトシへ運び、そこで売却して銀に換えられた。例えば、その販売額は、1559年では7000ペソ、1564年では6000ペソ、1565年では5500ペソであった⁽⁶⁸⁾。

次に、巡察使ガルシ・ディエス(Garci Diez)が巡察訪問した翌年にあたる1568年の法令で、1万8000ペソの銀は、2万ペソへ、また、1000着の衣類は1600着へと、つり上げられた⁽⁶⁹⁾。さらに、副王トレドの命令によって行なわれたペドロ・グティエレス・フローレス(Pedro Gutiérrez Flores)による巡察の後の1574年までに、チュクィート地方に課せられた貢納税額は、1553年の40倍にあたる、年間8万ペソに及んだ⁽⁷⁰⁾。このことは、1570年代に入ると、ポトシ周辺地域に対する副王トレドの政策がきわめて搾取的性格をおびていたことを示している。貢納税の大幅な増加は、ポトシ商業市場への物資提供や、鉱山への労働力提供増大という形をとったのであり、それはスペイン征服以前からみれば、共同体に対して想像を絶する程の重圧を及ぼしたのである。

(2) 貢納税の増加が共同体に及ぼした影響

上記でみたような貢納税の増加が伝統的な共同体にいかなる影響を及ぼしていたのかについて、以下に二つの点でみてみよう。

第一の点、インディアス会議(Consejo de las Indias)は、チュクィート地方からの貢納税の総額が、人口が多数であるのにも拘らず、低額であることを嘆いて、1561、1567年の二度にわたり巡察使を派遣して人口と財源を調査させた。そして、1572年にはその報告をもとにして副王トレドに命じて、同地方の納税者1人当りの税額を従来の徴収額から4ペソ3トミン(tomines)に下げ、それを厳重に徴収させてみた。すると奇妙にも、徴収合計額は、従来の2

万ペソから5万4000ペソへと逆に上昇するという結果になった⁽⁷¹⁾。このことは、アイヌの成年男子から徴収した貢納税が財務府へ納められる過程において、その仲介をしたスペイン人役人層(コレヒドール、その代理人(teniente)、会計官など)と副次的にはカシケによってひどい中間搾取がなされていたことを物語っていると見えよう。

もう一つの点は、トレドの行った1572年の税額調整と、税率の増加を懸念するカシケ親族など共同体富裕層の対応である。彼らの抗議により、トレドは1574年に再度の税額調整を行なったが、その際に「富裕な1000人のインディオ」から、「チュクィート地方における富裕な1000人の原住民戸籍簿」(Padrón de los Mil Indios Ricos de la Provincia de Chucuito)なるものが、巡察使に提供された。これは、この「1000人」が、合計「5000ペソ」の貢納税額分を負担するという主旨であった⁽⁷²⁾。このことは1人当たり平均5ペソということになり、各自がかなりの家畜を所有していた点を考慮するとき、この金額がかなり低いものであることがわかる⁽⁷³⁾。従って、この「1000人戸籍簿」の提出が意味するものは、上昇一途をたどる貢納税に対して、「1000人」の富裕層が「5000ペソ」の線に防波堤を築いて、それを上回らないようにした自己防衛的なものであったと言えよう⁽⁷⁴⁾。このような思考や行動はインカ以前からの伝統である「互恵」、「再分配」の観念では説明がつかないと言えよう。

3. 商業的側面からみたポトシへの物資供給

先に、貢納税を媒介とするチュクィート地方からポトシへの物資供給の公的な面でのメカニズムと、その品目・規模について考察した。ここでは、ポトシへの物資供給を、商業的な側面から考察してみたい。

(1) アンデス商業交易路

チュクィート地方は、ポトシへの「銀の道」、つまり、スペインによるポトシ支配の動脈であったアンデス商業交易路(幹線道)の中継点にあり、7つのプエブロのうち、ユングヨを除く6つまでがこの交易路に沿って位置していた。そして、前にもふれた通り、ポトシの膨大な人口を支えて鉱山を稼働させるのに必要な物資と原住民労働力の大半、および太平洋岸コースからの海外の奢侈品物資の大半が、この交易路を通じて供給されていたため、同地方はこれらの

輸送面でも重要な役割を担っていた。それは、同地方がアルティプラノの土着家畜の代表的産地として、膨大な家畜の数を有し、それらを用いてポトシへの隊商をいつでも編成しうる能力があったからである。また、それ故にこそ、商業交易路の中で最も利用価値のあるタンボの一つにもなっていた⁽⁷⁵⁾。

(2) タンボ及び物資輸送面でのミタ

カシケは、幹線道沿いの多くのタンボや郵便業務を維持するため、また商品等の輸送業務を行なうため、コレヒドールなどスペイン人から強制されて、インカ時代の「ミタ」の制度を用いることにより、各ブエプロ毎に指定された人数を徴集せねばならなかった⁽⁷⁶⁾。一方、このことが共同体にとっていかに苛酷なことを意味していたかは、例えば、1570年代以前でさえ、ポトシへ送った「500人」に支払われる俸給額では、1万8000ペソに増加した貢納税支払いは不可能であった。この場合が示しているように、カシケはスペイン人支配層からのいかなる要求に対しても、臨機応変に対応できるだけの余剰を常に確保していなければならなかった。そこで、カシケは現金収入の一つの方法として、タンボのミタに成員を徴集したり、成員や共同体の家畜をチュクィートからクスコへ、クスコからポトシへと商品輸送を行なうスペイン人に賃貸したりした⁽⁷⁷⁾。

タンボでの奉仕は、商人や旅行者の夜具の用意、灯火・炉の維持、役畜の世話、そして、草・木材の手配などで、それらは夜通し続けられたため、ミタヨは多忙の窮みにおかれていた。1567年頃で、年間の草・木材の代価の総額は6000ペソもあったとされ、大規模なものであったことを示している。ミタヨへの俸給は、1人1日分が0.5トミンで、それは一括してカシケに渡された。また、ミタヨの食事等は自前とされた。1567年の巡察使は、インディオにとってタンボのミタは、先の貢納税よりも負担が大きかったのではないかとさえ報告している⁽⁷⁸⁾。

次に、物資輸送に関するミタの仕事は、第一に、多くの海外からの商品やコスタのワイン等を、アリカ(Arica)やイロ港、アレキパなどコスタ方面からアルティプラノを経由して、ポトシへ向けて輸送する仕事であった。例えば、アレキパ〜チュクィート間の38レグア(約210キロ・メートル)のアンデス横断ルートを輸送するには1カ月を要し、その俸給は1人当り5〜6ペソであっ

た。また、チュクィート～ラパス間の34レグア(約190キロ・メートル)は、25～30日の行程であり、1人当りの俸給は4～5ペンであった⁽⁷⁹⁾。次に、鉱山や高地では不可欠であったコカの葉を、クスコからポトシへ輸送する仕事があった。クスコはコカの一大集散地であり、チュクィート地方からは、300人以上のミタヨが家畜と共にスペイン人に賃貸され、この160レグア(約900キロ・メートル)に3～5カ月を要し、1人当りの俸給は14～15ペソであった⁽⁸⁰⁾。例えば、クシはクスコからポトシへの輸送用に、70人を賃貸し、844ペソを受けとっていた⁽⁸¹⁾。以上にみてきたミタヨへの俸給は、同地方の家畜1頭の価格が7～8ペソであった⁽⁸²⁾ことを想起すれば、その労働の割にはきわめて低額なものであったといえる。第一の商品輸送に従事したミタヨの数の規模は明確ではないが、インカ時代と比較しても、かなりな負担であったと言える。

(3) 織物・衣類製作のミタ

これは、コレヒドールの命令で、インカ時代の「織物・衣類の租税」の制度に基づき、カシケが共同体のインディオに、男女、年齢の区別なく、アンデスの土着家畜や羊の毛などを原料として、織物・衣類を製作させるミタであった⁽⁸³⁾。スペイン人発注者は、ポトシ市場に向けての商品を得るために、コレヒドールやカシケを仲介として共同体成員の労働力に頼らねばならなかった。そして、1着の衣類製作には8～10人で1か月半を要した。製品が仕上がると、仲介役のコレヒドールはそれを発注者へ渡し、その代価として1着分につきカシケへの2ペソに法外な自己の仲介料を加算して、発注者へ請求した⁽⁸⁴⁾。このミタの規模確定は困難であるが、1567年当時、あるコレヒドールは9人の商人からの依頼によって8350着を織らせていたという記録がある。また、カシケは年間242着を課していた記録がある⁽⁸⁵⁾。インカ時代には同じカシケが年間に11～45着を課していたことを想起するとき、その収奪がいかにすさまじいものであったかがわかる。

(4) レパルト及びドミニコ会士による収奪

チュクィート地方に居住していたスペイン人の多くは、ポトシ市場用商品などの一部を、高額で、カシケを通じてインディオに強制割り当てする(＝レパルト, repartos)傾向がみられた。それらは、インディオがあまり使用しない不

必要な商品を大量に含んでいた。また、レパルトに立ち合った判事(justicia)は、カシケから担保として銀(pesos corrientes)を取っておいた⁽⁸⁶⁾。

次に、ドミニコ会士はポトシへ供給する物資を得るために、カシケを通じて、土地耕作、牧畜、織物製作、輸送などの仕事をインディオに担わせた⁽⁸⁷⁾。ドミニコ会は、ポトシでは銀山に投資を行なって、銀を採掘していた⁽⁸⁸⁾。なお、1567年に7つのプエブロに居住していたドミニコ会士の人数は16人であった。会士に提供されていたミヨタの会計は、60人余りであったが、その負担の規模は明らかでない。ただ、1567年までに、共同体の牧草地(estancia)や農耕地(chacara, chacra)の幾つかが、16人の修道士たちに譲渡されていたという事実がある⁽⁸⁹⁾。

4. ポトシ銀山への労働力提供と、その影響

コレヒドールの命令により、7つのプエブロの各カシケが、ポトシのミタ提供を行なったが、その形態もまたインカ時代の「ミタ」に基づいていた⁽⁹⁰⁾。

(1) ポトシ銀山への労働力提供規模の変化

16世紀に、チュクィート地方からポトシへ提供されたミタヨの人数は、1586年までについては、ほぼ明らかである。前に考察した如く、同地方でも、1570年代前半の副王トレドの「ミタ掌握・再編」政策の契機に変化がみられるため、その規模の点については2つの時期に分けて検討する必要がある。

第一の時期は、前にみた如く、1559年からガルシ・ディエスが巡察した時の1567年を経て、「ミタ再編」へ到るまでの時期である。この時期の年間提供数は、約500人に一定していたと考えられる⁽⁹¹⁾。

第二の時期は、ミタ選出のリーダーシップが共同体から完全に王室側に移った「再編」以降である。さらに、この時期は、「実験期」と1567年以降の時期とに分けられる。「実験期」では、年間提供数は1100人に増大していた⁽⁹²⁾。1576～1577年までは年間2500人前後と考えられる⁽⁹³⁾。この場合、インディオは、ポトシへの約616キロ・メートルの距離を約2カ月かけて移動し、ポトシで6カ月間ミタ労働に服した。計算上、インディオが労働を終了した後、直ちに原住地へ帰還したと仮定すれば、その帰路に2カ月を要するから、インディオが原住地を離れ、労働終了後再び帰着するまでの合計期間は、約10カ月と

算出される。このインディオは、帰着時から数えて2年10カ月後には、再びポトシへ引き抜かれたことになる⁽⁹⁴⁾。

1578年の年間提供数は、1576～77年期と大差ないが⁽⁹⁵⁾、4カ月単位で、一度の提供は、その数字の1/3である800人余りであった。また、インディオが共同体を離れたのが約8カ月、そして原住地への帰着時から5年10カ月後には再びポトシへ狩り出された計算になる⁽⁹⁶⁾。

1585年の場合、第2表の如く、年間提供数は2202人であり、4カ月毎に734人が提供されていた⁽⁹⁷⁾。また、1586年の年間のそれは2200人であったといわれる⁽⁹⁸⁾。よって、これらの700人余りの人数も同様に約8カ月間共同体を離れ、帰着時から再度の提供までの期間は5年10カ月となる。

さて、こうした、インディオが「共同体を離れていた期間」は、ポトシでの労働期間をもとに算出したものであって、ミタヨの労働期間が実際には予測困難であったことを考慮すると⁽⁹⁹⁾、実際には、この計算を上回っていたことも十分考えられる。

(2) ポトシ・ミタの影響

以上の状況において共同体成員はどのように対応したであろうか。

① 「富裕層」によるミタ回避

「富裕な1000人戸籍簿」の提出行為に示された如く、共同体に存在していた富裕層は「ミタ免除金」を支払うことによって、ミタを回避していた。例えば、1596年の1人当りの回避額は426ペソであったといわれる⁽¹⁰⁰⁾。ミタを回避した者の規模は明確ではないが、少なくとも免除金の捻出が可能とみなせる「富裕な1000人」は、その中に含まれていたと考えられる。

② 被徴集者の対応

免除額の支払いが困難であった一般の成員は徴集されることになった。徴集された者はポトシ・ミタの虐待や悲惨ぶりを前もって察知していたことは当然予想される。「再編」以降の時期における彼らの対応の特色は以下3点に示される。

第一は、徴集された者の大半がポトシへ家族(女・子供)を伴うようになったことである。そこで、ポトシへの移動人数は実際には、先にみた規模の数倍に膨張していたのであった⁽¹⁰¹⁾。

第二は、ポトシへの2カ月の移動費用は自己負担であったため、家族を同行したその大集団は、全体で3～4万頭の土着家畜をはじめとして、食糧、衣類など彼らの所有物総てを引き出してポトシに行かねばならなかったことである⁽¹⁰²⁾。多くが途中で消費されたにも拘らず、同地方からポトシへ到着した財貨総額は年間32万ペソ(pesos corrientes)にも達する価値のものであったといわれる⁽¹⁰³⁾。

第三は、その大集団の中の多くが、逃亡、死亡、及びポトシへの残留等により、原住地へ戻れないという現象が生じたことである⁽¹⁰⁴⁾。そのことは、例えば、その改善策の一つとして、1590年代に副王ベラスコ(Luis de Velasco)は3度に渡り、同地方出身のインディオへの旅費支払い等を王室へ懇願していることによっても示されている⁽¹⁰⁵⁾。

次に、こうした徴集された者の対応によって、共同体はいかなる影響を被ったか。人口の問題にしぼって、以下2点を指摘するに止めたい。

第一は、同地方の人口が減少したことである。スミス(C. T. Smith)は「再編」以前の場合、1566年の総人口がインカ時代末期(1520～25年)のその1/3に低下していたと推計している⁽¹⁰⁶⁾。また、「再編」以降では成年男子の人口減少が著しかった。例えば、1583年の1万7058人は、1628年では1万3364人に減少していた⁽¹⁰⁷⁾。

第二は、1566年の総人口6万3012人を年齢・性別によって分析すると、17～50歳前後の年齢層に未亡人や未婚女性がかかなりな規模で男性を超過していたことがわかる⁽¹⁰⁸⁾。

無論、以上2点の原因をすべてポトシのミタに帰すことはできないであろう。しかしながらインカ時代の「ミタ」と比較した場合、ポトシのミタが多くて共同体に及ぼした重圧は、はかり知れない程のものであったといえよう⁽¹⁰⁹⁾。

IV. カシケの社会的立場の変化と平民層の抵抗

—結びにかえて—

プレ・インカからインカ期、そして、スペインの征服時代を通じて、アルティプラノのティティカカ湖西岸一帯の原住民共同体社会を特徴づけていたもの

の一つは、共同体を代表したカシケ層と構成員との関係であった、カシケ・プリンシパル、その下のプエブロの各パルチャリダのカシケ、その下のアイユの長のプリンシパル、そしてその下のアイユ成員というヒエラルキーを持ち、その間が「互恵」と「再分配」の観念に貫ぬかれていたアイマラ族を主とするルパカの集落組織と行政機構は、タワンティン・スーユ帝国に編入されてもそのヒエラルキーを保存していた。また、インカとの関係においても「互恵」、「再分配」の観念が維持され、それに基づいて、「生産」、「所有」、「租税」の概念が規定された。よって、インカ時代においても、カシケ層は、共同体構成員の保護者としての役割をはたすことで、社会的威信を保ち、その返礼を受けとっていた。ところが、貴金属(銀)の獲得を目的としてポトシ銀山に目をつけ、ポトシを、ペルー副王領はもとより新大陸の帝國的支配の一大拠点としたスペインは、ルパカ征服後、それを単にクフのプエブロの集合に分断しそれらをポトシ銀山経営の道具として全面的に従属させていった。この結果、共同体の伝統的社會システムは、容赦なく切り崩されていった。

そこで、まず問題となるのは、ポトシへの従属化が進む中で、伝統的に、社会的威信によって共同体成員の「保護者」としての地位を保っていたカシケとスペイン人支配者との間の関係である。

(1) 2人のカシケ・プリンシパルの場合

インカ時代のチュクィートのプエブロにおけるカリとクシの70~100トップと50トップの土地は、1567年では、それぞれ50トップと20~30トップへと半減しており、また、1567年までに、他の6つのプエブロでインカ時代にカリのために耕作していた各20トップの土地は、耕作が中止されていた。また、ポマタでは、カリへの奉仕者をすでに送らなくなっていた⁽¹¹⁰⁾。このことは、かつてルパカ全体の代表者であったカリの権力(威信)が1567年までには零落していたことを示すとともに、かつてのルパカの2人のカシケ・プリンシパルが、単なるチュクィートのプエブロのカシケに過ぎなくなり、他の6つのプエブロのカシケと同等の地位を占めるようになったとみなせよう。この主要な原因としては、征服によってコレヒドール等のスペイン人官吏層が出現したことや、キリスト教が従来の太陽神崇拜、土着宗教や儀礼を排除、破壊したため、従来、カシケ・プリンシパルが果たしていた機能や役割が消失してしまったことであ

ろう⁽¹¹¹⁾.

(2) カシケの場合

征服後 1567 年では、プエブロのアイユ成員はカシケの土地を耕作していた。カシケは、労働期間中は、耕作者に食料、ココ、衣類を支給することで報いていた⁽¹¹²⁾。しかしながら、他方では、スペイン人支配層は、原住民社会のエリートとしての社会的威信をもつカシケを利用して、原住民を服従させポトシへ従属させようとした。そこで、カシケとしては、スペイン人からの強制的要求に何としても答えることが、自己存在の絶対的前提であるという立場に立たされた⁽¹¹³⁾。よって、カシケは、いついかなる場合でも、スペイン人の要求に対応できるだけの経済的能力を身につけねばならなかった。そのためには、カシケは、一方で、プエブロの成員との間に、「互惠」、「再分配」関係を保ちつつも、自らはスペイン人の市場経済にアクティブに参加して貨幣を蓄積する必要に迫られた。この点は、先にみた如く、1567 年頃にカリが成員に 242 着を織らせ、クシがクスコからポトシへの輸送用に 70 人のインディオを賃貸した行為に示されているが⁽¹¹⁴⁾、経済力を身につけるため、より直接的に彼らが行なったのは、ポトシ銀山への投資であった。クシは 1583 年の記録では、ポトシのディエゴ・プーマ鉞脈(Veta que registró Diego Puma, indio)へ投資していたとされる⁽¹¹⁵⁾。当時、チュクィート地方のカシケやインディオがポトシ銀山へ投資するのは、以下で示すように、頻繁にみられた現象であった。

(3) カシケの一族及び富裕層の登場

この点については、1574 年の「富裕な 1000 人戸籍簿」を中心に検討して以下、3 つの例を示すにとどめたい。

第一の例は、1585 年の記録にある、「チュクィート地方からポトシのミタにインディオを提供していた」ペドロ・クティーパ(Pedro Cutipa)についてである。その記録には、「ポマタのウリンサヤのカシケ・プリンシパルにしてルパカ国の長(capitán)たるペドロ・クティーパ」とある⁽¹¹⁶⁾。この「ペドロ・クティーパ」の名前は、「1000 人戸籍簿」のうち、ポマタのウリンサヤに属するアイユ・コリャナ(Collana)の中に、はっきりと確認することができる。さらに、「1000 人戸籍簿」を検討すると、ポマタ、フリ、アコラのアナンサヤにも、同一氏名が認められる⁽¹¹⁷⁾。また、更に細部をみていくと、「クティーパ」の付く

名前が圧倒的に多く、「1000人」中、109人がこれに該当する⁽¹¹⁸⁾。これは、インカ時代のカシケの家系が、1574年には共同体の富裕層の間で勢力を拡大し、1585年までには、ポマタの一カシケでありながら、チュクィート地方を代表するまでになっていたことを示すものである。

第二の例も、カシケ一族の台頭を示すものである。1567年の証言で、フランシスコ・ニナ・チャンビーリャ(Francisco Nina Chanbilla)は、インカ時代に、フリのアナンサヤのカシケであったと述べている⁽¹¹⁹⁾。このチャンビーリャ家の者は、「1000人戸籍簿」では、フリのアヤンカスに1人(Francisco Chanbilla)、ポマタのアナンサヤのアイユ・コリャナ(Collana)の中に3人(Don Martin Chanbilla, Mateo Chanbilla, Pablo Chambilla)いるのが分る⁽¹²⁰⁾。ところが、17世紀に入って、1618年と1626年に、同地方からポトシへ提供するミタを選んだ人物が、ポマタのアナンサヤのカシケ、ディエゴ・チャンビーリャ(Diego Chambilla)であった。この人物は、ポトシにポマタ出身の親類を多くもち、ヨーロッパ人を代理に据え、ポトシで大規模な商業を営んでいたのである⁽¹²¹⁾。

第三の例は、富裕なインディオによるポトシ銀山への投資である。「1000人戸籍簿」のポマタのアナンサヤのアイユ・コリャナの成員であったディエゴ・アコ(Diego Aco)は⁽¹²²⁾、1583年には、ポトシの2つの鉱脈に投資しており⁽¹²³⁾、また1585年には、コリャ(Colla)国の長として、ミタの選出にあっていた⁽¹²⁴⁾。また、「1000人戸籍簿」には名前がみあたらなかったが、1583年に、ポマタのインディオであったディエゴ・グッアカ(Don Diego Guaca)やユングヨのインディオであったドミンゴ・キンタ(Domingo Quinta)もポトシ銀山に投資していた⁽¹²⁵⁾。

上述したようなカシケの一族や富裕層は、ポトシ市場経済にアクティブに参加することを大きな要因として生まれたものといえる。

(4) アイユ成員(平民層)の抵抗

「プリンシパル」は、征服後いかなる特権も与えられなかったから⁽¹²⁶⁾、アイユ成員の一員とみなしても差支えないであろう。ところで、共同体の大多数を占めたアイユ成員が状況に対していかに対応したかを示す好例として、ポトシ・ミタの提供に対する抵抗の例(貢納税徴収に対する抵抗例でもある)を簡単

に紹介してみよう。ポトシへのミタ提供に対する唯一の抵抗の形態は、「共同体を離れること(根なしの浮浪民 *mingados* になること)」であった。ポトシへ提供される以前の場合としては、①自殺などによる回避、②共同体や提供される途中からの逃亡、提供後では、③ポトシでの死亡、また、ミタ終了後では、④浮浪民としてポトシへ残留、又は⑤主に東部の盆地への逃亡(スペイン人経営の農園へ、ヤナコナ *Yanaconas* として入る)等があげられる⁽¹²⁷⁾。1567年の報告によれば、ポトシへ行った500人のうちの何人かが、居住地へ帰ってみると、かつての土地は代りの者が耕作していた⁽¹²⁸⁾、とあるのに対し、1580~90年代になると、ポトシから帰った者は、元の土地が荒れ放題であることを知った、とされている⁽¹²⁹⁾。この両者の相違は、共同体を離れた成員の数が増大しつつあったことを意味しているものとみても差支えあるまい。

以上にみた成員の「共同体離れ」による抵抗は⁽¹³⁰⁾、別の面からみれば、スペイン人支配層のもとで生きのびてゆく必要上、ポトシ等の市場経済に参加しつつあったカシケがすでに共同体のなかで社会的威信をとどめるすべもなく失ないつつあったことを示していると言えよう。

注

- (1) 大塚久雄『近代欧洲経済史序説』(〔大塚久雄著作集、第2巻〕、岩波書店、1969年) 45-73ページ。川北稔「ヨーロッパの商業的進出」(〔世界歴史16〕、岩波書店、1970年) 117-142ページ、Earl J. Hamilton, *American Treasure and the Price Revolution in Spain, 1501-1650* (New York: Farrar, Straus and Giroux, 1977)/Clarence H. Haring, *Trade and Navigation between Spain and the Indies in the Time of the Hapsburgs* (Gloucester, Mass.: Harvard University Press, 1918, 1964)。
- (2) ポトシについては以下参照。林邦夫「16世紀における新大陸貿易とスペイン国家財政」(『史学雑誌』第86編第2号、1977年)18-22ページ。Gwendolin B. Cobb, "Potosi and Huancavelica Economic Base of Peru, 1545-1640," (Ph. D. dissertation, University of California, Berkeley, 1947), pp. 177-180. /Gwendolin B. Cobb, "Supply and Transportation for the Potosi Mines, 1545-1640," *Hispanic American Historical Review* (以下、*HAHR* と略記), Vol. 29(1949), pp. 25-27, pp. 34-35. /Bailey W. Diffie, "Estimate of Potosi Mineral Production, 1545-1555," *HAHR*, Vol. 20, (1940), pp. 275-282. /Clarence H. Haring, "American Gold and Silver Production in the First Half of the Sixteenth Century," *The Quarterly Journal of Economics*, Vol. 29, (May 1915), pp. 433-479. /George Kubler, "The Quechua in the Colonial World," in *Handbook of South*

American Indians, Vol. 2, eds. Julian H. Steward (Washington: Smithsonian Institution, 1946), p. 373, p. 379./Lamberto de Sierra, “Razón certificada que se envió a Carlos III de las sumas que por razón de las reales derechos de quinto y diezmos han contribuido las caudales sacados del famoso Cerro de Potosí, desde el año de 1556 hasta 31 de diciembre de 1783,” en *Colección de Documentos Ineditos para la Historia de España*, Tomo 5, (Madrid: 1964), pp. 170-184.

ポトシの人口、市場等については、Woodrow Borah, *Early Colonial Trade and Navigation between Mexico and Peru* (Berkeley and Los Angeles: 1954), pp. 80-82./Lewis Hanke, *The Imperial City of Potosí: An Unwritten Chapter in the History of Spanish America* (The Hague: 1956), pp. 1-3.

その他以下参照. Marie Helmer, “Luchas entre Vascongados y Vicuñas en Potosí (1),” *Revista de Indias*, Num. 81-82(1960), pp. 186./Luis Martin, *The Kingdom of the Sun: A Short History of Peru* (New York: 1974), p. 71, pp. 125-126./Bernard Moses, *The Spanish Dependencies in South America*, Vol. 2 (New York: Cooper Square Publishers, Inc, 1965), p. 6, pp. 8-10./Jose F. Velarde, *Historia de Bolivia*, Tomo1 (La Paz-Cochabamba: Los Amigos del Libro, 1978), p. 112, p. 143. /Arthur F. Zimmerman, *Fifth Viceroy of Peru, 1569-1581* (New York: Greenwood Press, Publishers, 1938, 1968), p. 175.

- (3) 太平洋岸経由によるポトシへの物資供給については、Borah, *op. cit.*, pp. 80-82, p. 112, p. 180. /Cobb, *Ph. D. dissertation, op. cit.*, pp. 180-181. /Cobb, *HAHR, op. cit.*, pp. 27-28, pp. 35-37, p. 40. /William L. Shurz, “Mexico, Peru, and the Manila Galleon,” *HAHR*, Vol. 1(1918), pp. 389-402.

その他以下を参照. D. A. Brading and Harry E. Cross, “Colonial Silver Mining: Mexico and Peru,” *HAHR*, Vol. 52(1972), p. 562. /James Lang, *Conquest and Commerce: Spain and England in the America* (New York: Academic Press. 1975), pp. 57-59, p. 65. /Martin, *op. cit.*, pp. 113-114, pp. 129-130. /Carlos Pereyra, “La mita peruana en la calumnioso prólogo de las noticias secretas,” *Revista de Indias*, Num. 6(1941), p. 15. /Donald E. Worcester and Wendell G. Schaeffer, *The Growth and Culture of Latin America* (New York: Oxford University Press, 1956), pp. 230-232.

筆者は1982年3月に、リマから海岸部を南下し、カマナ(Camana)よりアレキパを経由してアルティプラノに入り、クスコ～ポトシ間をすべて陸路で旅するという機会をもった。ポトシはかつての繁栄ぶりは見る影もなく、厳しい傷跡を残す背後の山(Cerro)とともに、その寂れようはひどいものであった。しかし、それとは対称的に、収穫期を前にしたアルティプラノやその帯状のなかで広大な平原をなす緑のチュクイート地方の豊穡なたたずまいには、驚嘆せざるを得なかった。

- (4) ラプラタ川経由によるポトシへの物資供給は、Cobb, *Ph. D. dissertation, op. cit.*, pp. 192-212. /Cobb, *HAHR, op. cit.*, pp. 44-45. /Harry E. Cross, “Commerce and Or-

- thodoxy : A Spanish Response to Portuguese Commercial Penetration in the Viceroyalty of Peru, 1580-1640," *The Americas*, Vol. 33 (1978), p. 156. /その他以下参照.
- Brading and Cross, *op. cit.*, p. 561, p. 576. /Bailey W. Diffie, *Latin American Civilization* (New York : 1967), pp. 327-331. /Lewis Hanke, "The Portuguese in Spanish America, with Special Reference to the Villa Imperial de Potosí," *Revista de Historia de America*, Vol. 51 (México : 1961), pp. 5-27. /Haring, *Trade and Navigation...*, pp. 140-143. /Moses, *op. cit.*, p. 31. /Mario Rodríguez, "The Genesis of Economic Attitudes in the Rio de la Plata," *HAHR*, Vol. 36 (1956), p. 175, p. 177. /Worcester, *op. cit.*, p. 230, pp. 236-239.
- (5) Bartolomé Arzáns de Orsúa y Vela, *Historia de la Villa Imperial de Potosí*, I, eds. Lewis Hanke and Gunner Mendoza (Providence : Brown University Bicentennial Edition, 1965), pp. 8-9. その他以下参照.
- Hanke, *The Imperial City...*, pp. 28-29. /Luis Capoche, "Relación general de la Villa Imperial de Potosí," en *Biblioteca de Autores Españoles*, Tomo 122 (Madrid : 1959), pp. 27-28.
- (6) ディエス・デル・コラル, 小島威彦訳『ラテン・アメリカの旅』(未来社, 1971年) 46-47 ページ. Borah, *op. cit.*, p. 80, p. 124. /Capoche, *op. cit.*, p. 172. /Haring, *Trade and Navigation...*, pp. 117-120/Lang, *op. cit.*, pp. 47-48.
- (7) Marcos Jiménez de Espada, "Descripción de la Villa Imperial de Potosí, -año de 1603," en *Relaciones geograficas de Indias*, II (Madrid : 1885), p. 124, pp. 127-129.
- その他以下参照. Capoche, *op. cit.*, pp. 175-180. /James Lockhart and Enrique Otte, translated and edited, *Letters and People of the Spanish Indies Sixteenth Century* (Cambridge : Cambridge University Press, 1976), p. 84. /Moses, *op. cit.*, pp. 25-26. /Rodríguez, *op. cit.*, pp. 171-179. /Worcester, *op. cit.*, pp. 236-237.
- (8) ポトシのミタについては以下参照. Mario Góngora, translated by Richard Southern, *Studies in the Colonial History of Spanish America* (New York : Cambridge University Press, 1975), p. 144. /Harold Osborne, *Indians of the Andes* (London : Routledge and Kegan Paul LTD, 1952), pp. 93-94, p. 130. /John H. Rowe, "The Incas under Spanish Colonial Institution," *HAHR*, Vol. 37 (1957), p. 170, p. 172. /John H. Rowe, "Inca Culture at the time of the Spanish Conquest," in *Handbook of South American Indians*, Vol. 2, eds. Julian H. Steward (Washington : Smithsonian Institution, 1946), pp. 267-268. /Donald L. Wiedner, "Forced Labor in Colonial Peru," *The Americas*, Vol. 16 (1961), p. 366.
- (9) Wiedner, *op. cit.*, p. 361.
- (10) James Lockhart, *Spanish Peru, 1532-1560* (Wisconsin : Wisconsin University Press, 1968), p. 208, p. 219.
- (11) Rowe, *HAHR*, *op. cit.*, p. 170.

- (12) Gabriel Rene Moreno, *La Audiencia de Charcas* (La Paz: Ministerio de Educación y Cultura, 1970), pp. 25-28.
- (13) Cobb, *Ph. D. dissertation, op. cit.*, pp. 63-64. /Wiedner, *op. cit.*, p. 361.
- (14) 副王トレドの対ポトシ政策については以下参照。ホセ・デ・アコスタ, 増田義郎訳『新大陸自然文化史』大航海時代叢書Ⅲ(岩波書店, 1966年)353-357ページ。近藤仁之「水銀アマルガム法, 水銀供給源, 及び価格革命」(『社会経済史学』25巻2, 3号, 1959年)140-143ページ。Modesto Bargalló, *La amalgamación de los minerales de plata en Hispanoamerica colonial*(México: Compañía Fundidora de Fierro y Acero de Monterrey, S. A., 1969), pp. 166-174. /Modesto Bargalló, *La minería y la metalurgia en la America Española durante la epoca colonial*(México: Fondo de Cultura Económica, 1955), p. 96, p. 135, p. 242. /Boraho, *op. cit.*, p. 90. /Brading and Cross, *op. cit.*, p. 553, p. 560. /Cobb, *Ph. D. dissertation, op. cit.*, pp. 65-68. /Cobb, *HAHR, op. cit.*, p. 36. /Cross, *op. cit.*, p. 152. /Góngora, *op. cit.*, p. 146. /C. S. Kroeber, "The Mobilization of Philip II's Revenue in Peru, 1590-1596," *Economic History Review*, Vol. 10 (1958), pp. 439-441. /Kubler, *op. cit.*, p. 372. /Philip A. Means, *Fall of the Inca Empire and the Spanish Rule in Peru, 1530-1780* (New York: 1971), p. 185. /Martin, *op. cit.*, pp. 127-129, p. 173. /Alejandoro Malaga Medina, "Las reducciones en el Perú, 1532-1600," *Historia y Cultura*, Vol. 8 (Lima: 1975), pp. 157-165. /Osborne, *op. cit.*, p. 170, p. 172. /W. F. C. Purser, *Metal Mining in Peru, Past and Present* (New York: 1971), p. 28, pp. 47-48, p. 51. /Rowe, *HAHR, op. cit.*, p. 156, pp. 171-172. /Wiedner, *op. cit.*, p. 362, pp. 366-368, p. 372, p. 375. /Worcester and Schaeffer, *op. cit.*, p. 233, p. 235. /Zimmerman, *op. cit.*, pp. 131-132.
- (15) 「1万3500人」の根拠は, クスコからタリハマまでの対象地域に, 当時約9万5000人の成年男子がおり, 一度にその1/7が徴集されたとの理由による。Brading and Cross, *op. cit.*, p. 558. /Pedro Vicente Cañete y Dominguez, *Guia historia geográfica física, política, civil y legal del gobierno e intendencia de la provincia de Potosí, 1787*, ed. por Armando Alba (La Paz, Potosí: 1952), pp. 100-101. /Pereyra, *op. cit.*, p. 12. /Cobb, *Ph. D. dissertation, op. cit.*, p. 68. /Henry E. Dobyns and Paul L. Doughty, *Peru, A Cultural History* (New York: 1976), p. 102. /Martin, *op. cit.*, p. 73. /Osborne, *op. cit.*, p. 172. /Zimmerman, *op. cit.*, pp. 184-185.
- (16) Brading and Cross, *op. cit.*, pp. 558-559. /Rowe, *HAHR, op. cit.*, p. 172. /Wiedner, *op. cit.*, pp. 367-368.
- (17) Cobb, *Ph. D. dissertation, op. cit.*, p. 78. /Dobyns and Doughty, *op. cit.*, p. 103. /Rowe, *HAHR, op. cit.*, pp. 172-173. /Wiedner, *op. cit.*, pp. 367-368.
- (18) Cobb, *Ph. D. dissertation, op. cit.*, p. 87. /Dobyns and Doughty, *op. cit.*, p. 103. /Martin, *op. cit.*, p. 74. /Rowe, *HAHR, op. cit.*, pp. 172-174. /Wiedner, *op. cit.*, p. 368.
- (19) Cobb, *Ph. D. dissertation, op. cit.*, p. 77. /Bargalló, *La minería y la metalurgia...*,

- p. 241. /Marie Helmer, "Un tipo social, el minero de Potosí," *Revista de Indias*, Num. 16 (Madrid: 1956), pp. 85-92. /Purser, *op. cit.*, p. 29.
- (20) アコスタ, 前掲書, 342-344 ページ. Cobb, *Ph. D. dissertation, op. cit.*, p. 70, pp. 86-87. /Dobyns and Doughty, *op. cit.*, p. 102. /Jorge Basadre, "El régimen de la mita," *Letras* (Lima: 1937), pp. 346-347. /Martin, *op. cit.*, p. 74. /Osborne, *op. cit.*, p. 172. /Wiedner, *op. cit.*, p. 371.
- (21) Rowe, *HAHR, op. cit.*, pp. 173-175. /Wiedner, *op. cit.*, p. 370.
- (22) Rowe, *HAHR, op. cit.*, pp. 170-171. /Wiedner, *op. cit.*, p. 369.
- (23) Row, *HAHR, op. cit.*, p. 175. /Wiedner, *op. cit.*, p. 371.
- (24) ミヨタの虐待については以下参照. Basadre, *op. cit.*, pp. 338-339, pp. 344-345. /Capoche, *op. cit.*, p. 109. /Cobb, *Ph. D. dissertation, op. cit.*, pp. 73-81, p. 85, p. 88, pp. 90-91, pp. 95-96. /Moses, *op. cit.*, pp. 8-10. /Osborne, *op. cit.*, p. 173. /Rowe, *HAHR, op. cit.*, pp. 173-175. /Wiedner, *op. cit.*, pp. 367-368. /Worcester and Schaeffer, *op. cit.*, p. 235.
- (25) 海岸部のサマ(Sama)はルバカに從属していた. Garcí Diez de San Miguel, *Visita hecha a la Provincia de Chucuito en el año 1567*, eds. Waldemar Espinoza Soriano (Lima: Casa de la Cultura del Perú, 1964) (以下, *Visita.* と略称), p. 27. /Harry Tschopick, "The Aymara," in *Handbook of South American Indians*, Vol. 2, eds. Julian H. Steward (Washington: Smithsonian Institution, 1946), p. 507.
- (26) Rowe, *Handbook, op. cit.*, p. 203.
- (27) Tschopick, *op. cit.*, pp. 507-508.
- (28) Rowe, *Handbook, op. cit.*, p. 205, pp. 265-268. /Tschopick, *op. cit.*, pp. 507-508.
- (29) J. Alden Mason, *The Ancient Civilization of Peru* (Switzerland: Plata Publishing Ltd, 1975), pp. 174-177. /Carlos J. Díaz Rementería, *El cacique en el virreinato del Peru* (Sevilla: Universidad de Sevilla, 1977), pp. 29-30. /Karen Spalding, "Kurakas and Commerce: A Chapter in the Evolution of Andean Society," *HAHR*, Vol. 53 (1973), pp. 582-583. /Velarde, *op. cit.*, p. 24, pp. 43-45, pp. 48-49.
- (30) *Visita.*, pássim.
- (31) Spalding, *op. cit.*, pp. 583-584. /Tschopick, *op. cit.*, pp. 539-540.
- (32) 増田義郎『インディオ文明の興亡』(『世界の歴史7』, 講談社, 1977年)207-208 ページ. John V. Murra, "An Aymara Kingdom in 1567," *Ethnohistory*, Vol. 15 (1968), p. 126, p. 143. /Tschopick, *op. cit.*, p. 528. /*Visita.*, pássim.
- (33) 「互恵」, 「再分配」概念については, 以下参照. 増田義郎「アステカ・インカ社会研究の系譜」(『現代のエスプリ』No. 125, 1977年)19 ページ. Murra, *op. cit.*, p. 130, /Nathan Wachtel, *Sociedad e ideología* (Lima: Instituto de Estudios Peruanos, 1973), pp. 59-78. /Nathan Wachtel, *Los vencidos: los indios del Perú frente a la conquista española (1530-1570)* (Madrid: Alianza Editorial, S. A., 1976), pp. 96-113.

- (34) 増田, 前掲書, 340 ページ.
- (35) N. ワシュテル, 小池佑二訳「インカ国家の経済構造」(『現代のエスプリ』No. 125, 1977年)142-143ページ.
- (36) Murra, *op. cit.*, p. 120. /Tchopick, *op. cit.*, p. 520.
- (37) C. T. Smith, "Depopulation of the Central Andes in the 16th Century," *Current Anthropology*, XI, 4-5(Lima: 1970), p. 454. /Tschopick, *op. cit.*, p. 503, pp. 512-513.
- (38) ルパカの垂直統御と, 物資補完については以下参照. 増田, 前掲書, 208 ページ. ワシュテル[前掲論文], 144-145 ページ. Murra, *op. cit.*, pp. 120-125. /Franklin Pease G. Y., *Del Tawantinsuyu a la historia del Perú* (Lima: Instituto de Estudios Peruanos, 1978), pp. 136-140. /Rowe, *Handbook*, *op. cit.*, pp. 265-268. /Smith, *op. cit.*, p. 454. /Visita., p. 125. /Wachtel, *Los vencidos...*, p. 107, p. 162.
- (39) ワシュテル[前掲論文]145-146 ページ.
- (40) *Visita.*, pássim.
- (41) *Visita.*, p. 111.
- (42) 1 トップ(tupu, topo) = 3 ファネガ(fanega, hanega) = 1800 m², ワシュテル[前掲論文]146 ページ.
- (43) キープ統計による. 7つのプエブロのアイマラ, ウル両族の, パルシャリダ毎の構成は明白. 詳細は, *Visita.*, pp. 64-66. 参照.
- (44) 2人のカシケ・プリンシパルがプエブロ毎に占有した土地(畑) (単位: トップ)

プエブロ		チュク イート	アコラ	イラベ	フリ	ポマタ	ユング ヨ	セビタ
カリ	土地	70~100	20	20	20	20	20	20
クシ	土地	50	5	2	6	10	7	7

Murra, *op. cit.*, p. 129. より作成.

- (45) *Visita.*, p. 107.
- (46) Murra, *op. cit.*, p. 131. /*Visita.*, p. 111.
- (47) *Visita.*, p. 65.
- (48) ワシュテル[前掲論文]151 ページ.
- (49) 増田, 前掲書, 234-235 ページ.
- (50) *Visita.*, p. 107.
- (51) Murra, *op. cit.*, p. 130, p. 135. /*Visita.*, p. 82, p. 86, p. 107, p. 117.
- (52) 増田, 前掲書, 236-237 ページ.

- (53) 2人のカシケ・プリンシパルへのミタ奉仕(年間) (単位:人)

	プエブロ	チュク イート	アコラ	イラベ	フ リ	ポマタ	ユング ヨ	セピタ
カ リ		60	3	3	?	?	?	?
ク シ		47	7	3	11	10	11	11

Murra, *op. cit.*, p. 129. より作成.

- (54) *Visita.*, p. 107, p. 111.
 (55) ワシュテル[前掲論文]151-152 ページ.
 (56) 2人のカシケ・プリンシパルが, アイユ成員の労働奉仕で得た衣類着数(年間)

(単位:着)

	プエブロ	チュク イート	アコラ	イラベ	フ リ	ポマタ	ユング ヨ	セピタ
カ リ		5	1~7	1~7	1~7	1~7	1~7	1~7
ク シ		12	3	4	6	3~4	3~4	3

Murra, *op. cit.*, p. 129. より作成.

- (57) *Visita.*, p. 107.
 (58) Edward Dew, *Politics in the Altiplano, the Dynamics of Change in Rural Peru* (Austin and London: University of Texas Press, 1969), pp. 19-20. /Fray Pedro Gutiérrez Flores, "Padrón de los mil indios de la provincia de Chucuito, 1574," en *Visita.*, p. 304.
 (59) Wachtel, *Los vencidos...*, p. 209.
 (60) Karen Spalding, "Indian Rural Society in Colonial Peru: The Example of Huarochiri," (Ph. D. dissertation, University of California, Berkeley, 1967), p. 192. /*Visita.*, p. 74, p. 78. /Wachtel, *Los vencidos...*, p. 183, p. 187.
 (61) 貢納税については以下参照. Kubler, *op. cit.*, pp. 370-371. /*Recopilación de leyes de los reynos de las Indias*, 4 Tomos, Madrid, 1681 (Madrid: Ediciones Cultura Hispánica, 1973), lib. vi, tit. 5, ley 21. /Spalding, *HAHR, op. cit.*, p. 585, p. 593. /Silvio Zavala, *El servicio personal de los indios en el Perú: extractos del siglo XVI*, Tomo I (México: El Colegio de México, 1978), p. 179. /Wachtel, *Sociedad...*, pp. 87-101.

チュクイート地方の成年男子(18-50歳)人口の推移 (単位:人)

1520-25年	1566年	1571年	1583年	1628年
20280	15404	17779	17058	13364

(1571年が1566年を上回った背景には、副王トレドのレドゥクシオンの影響が考えられる)

Kubler, *op. cit.*, p. 338., Smith, *op. cit.*, p. 457. より作成.

貢納税を免除された成年男子数は、1567年の場合、36人であった。 *Visita.*, p. 206.

- (62) *Visita.*, pp. 171-175, p. 207. /Wachtel, *Los vencidos...*, p. 163.
 (63) トウモロコシ, チューニョの単位当り価格—5.5ペソ, 4.5ペソより算出. *Visita.*, p. 15, p. 90, p. 97, p. 227.
 (64) 先の1—(4)—③を参照.
 (65) 1559年, チュクイート地方からの貢納税額(年間)

税	プエブロ	チュクイート	アコラ	イラベ	フリ	ポマタ	ユング	セピタ	サマ	合計
銀(ペソ)		2836	2640	1584	3332	3201	1155	2112	1140	18000
衣類(着)		166	153	93	206	191	66	125		1000

Visita., pp. 67-69. より作成.

- (66) 1559年, チュクイート地方からボトシ銀山へのミタ奉仕に送った500人(年間)
 (単位:人)

	プエブロ	チュクイート	アコラ	イラベ	フリ	ポマタ	ユング	セピタ	合計
人数		82	77	46	105	95	33	62	500

Visita., pp. 69-70. より作成.

- (67) *Visita.*, p. 93, p. 99.
 (68) *Visita.*, p. 19, pp. 207-208.
 (69) *Visita.*, pp. 271-272.
 (70) Wachtel, *Los vencidos...*, p. 165.
 (71) Murra, *op. cit.*, pp. 117-119. /Zimmerman, *op. cit.*, p. 48, pp. 173-174.
 (72) Flores, *op. cit.*, pp. 301-363.
 (73) 1574年, チュクイート地方の富裕な1000人戸籍簿の示す人数, 貢納税負担, 所有家畜数

	プエブロ	チュクイート	アコラ	イラベ	フリ	ポマタ	ユング	セピタ	合計
人数(人)		175	153	127	265	158	15	92	985
貢納税銀(ペソ)		818	702	554	1186	710	74	421	4465
所有家畜数(頭)		31397	20620	15783	32646	20500	1046	12188	134180

(「1000人」ではなく985人であり, 「5000ペソ」ではなく, 4465ペソとなった)
 Flores, *op. cit.*, pp. 306-344. より作成.

- (74) この点については, ジョン・ムラも暗示している. Murra, *op. cit.*, p. 120.
 (75) Capoche, *op. cit.*, p. 172. 同地では, 土着家畜は最大の財産であり, 全体の所有規模は明確ではないが, Juan Alanocaなるインディオは, 1人で5万頭を所有したといわれる. *Visita.*, p. 50, p. 213.
 (76) Wachtel, *Los vencidos...*, p. 199. このミタはワロチリ地方でも同様にみられた.

Spalding, *Ph. D. dissertation, op. cit.*, p. 20, p. 42.

- (7) *Visita.*, pp. 30-31.
 (78) *Visita.*, p. 36, p. 52, p. 213.
 (79) *Visita.*, p. 17, p. 104, p. 112.
 (80) *Visita.*, pp. 54-55, p. 158.
 (81) *Visita.*, p. 76.
 (82) *Visita.*, p. 24.
 (83) *Visita.*, p. 17, p. 38, p. 104.
 (84) *Visita.*, p. 44, p. 58, pp. 60-61, p. 98, p. 199.
 (85) *Visita.*, p. 58, p. 87.
 (86) 16世紀からコレヒドールのレパルト禁止令は、よく発令された。 *Recopilación*, lib. v, tit. 2, ley 25. /*Visita.*, p. 36, p. 59.
 (87) *Visita.*, p. 15, p. 87, p. 90, p. 97, p. 227.
 (88) Capoche, *op. cit.*, pp. 99-100.
 (89) *Visita.*, p. 15, p. 93, p. 187, pp. 227-231.
 (90) *Visita.*, pp. 69-70.
 (91) 先の2—(1)「貢納税」参照。
 (92) John V. Murra, “Aymara Lords and their European Agents at Potosí,” *Nova America*, Vol. 1(Torino: 1978), p. 234. /Pease, *op. cit.*, p. 128.
 (93) スミスの述べる1571年の同地方の貢納税対象者人口1万7779人をもとに算出。 |
 Smith, *op. cit.*, p. 459.
 (94) 先の、II—1—(2)「ミタ掌握・再編」以降参照。
 (95) “Relación hecha por el virrey Martín Enríquez de los oficios que se proveen en la gobernación de los reinos y provincia del Perú, 1583,” en *Gobernantes del Peru*, Tomo 9, eds. Roberto Levillier (Madrid: 1925), p. 150.
 (96) 先の、II—1—(2)参照。
 (97) 1585年、チュクイート地方からポトシ銀山のミタに徴集されたインディオ2202人の内訳 (単位:人)

プエブロ	チュクイート	アコラ	イラベ	フリ	ポマタ	ユングヨ	セピタ	合計
年間徴集人数	408	312	288	426	318	210	240	2202
4カ月毎の徴集人数	136	104	96	142	106	70	80	734

Capoche, *op. cit.*, p. 136. より作成.

- (98) Cobb, *HAHR, op. cit.*, p. 31. /Kubler, *op. cit.*, p. 372.
 (99) カニエーテ・イ・ドミンゲスは、1578年の場合、ミタヨの労働期間が20カ月にも及んだと述べている。 Cañete y Dominguez, *op. cit.*, pp. 100-101.

- (100) Rowe, *HAHR, op. cit.*, p. 176.
- (101) 詳しくは以下参照. Cobb, *HAHR, op. cit.*, p. 31. /Kubler, *op. cit.*, p. 372.
- (102) 詳しくは以下参照. Cobb, *HAHR, op. cit.*, p. 31. /Cobb, *Ph. D. dissertation, op. cit.*, pp. 229-230. /Kubler, *op. cit.*, p. 372.
- (103) ポトシへ到着した家畜の大半は、ポトシの肉屋へ売られた。Murra, *Nova America, op. cit.*, p. 235. /Zavala, *op. cit.*, p. 218. /*Visita.*, p. 79. サバラの述べる「32万ベソ」は、余りにも高額である。誇張があるものと考えてよからう。
- (104) Zavala, *op. cit.*, p. 218.
- (105) この点はサバラに詳しい。 *Ibid.*, p. 200, p. 204, p. 206.
- (106) Kubler, *op. cit.*, p. 338. /Smith, *op. cit.*, p. 457.
- (107) 前の注(61)参照。
- (108) Smith, *op. cit.*, pp. 457-458.
- (109) *Visita.*, p. 207.
- (110) *Visita.*, p. 100, p. 107, p. 111, p. 117.
- (111) 「カシケ・プリンシパル」なる名称は、征服後は、単にプエブロのカシケに対して使用される場合があった。 *Visita.*, p. 35, p. 36, p. 105.
- (112) *Visita.*, p. 117, /Wachtel, *op. cit.*, p. 194.
- (113) Spalding, *HAHR, op. cit.*, pp. 583-586. /*Visita.*, p. 58, p. 206.
- (114) 先の3—(2), (3)参照。
- (115) Capoche, *op. cit.*, p. 99.
- (116) *Ibid.*, p. 136.
- (117) Flores, *op. cit.*, p. 313, p. 323, p. 326, p. 334, p. 337.
- (118) 1574年「1000人戸籍簿」にみるクティーパー族の占有人数 (単位:人)

プエブロ	チュク イート	アコラ	イラベ	フ リ	ボマタ	ユング ヨ	セピタ	合 計
アナンサヤ	4	8	6	13	8	1	10	50
ウリンサヤ	16	10	5	6	10	2	1	50
合 計	20	18	11	28*	18	3	11	109**

*, ** フリの「アヤンカス」のバルジャリダの9人を含め、フリの合計を28人、全体合計を109人とする。 Flores, *op. cit.*, pp. 306-344. より作成。

- (119) *Visita.*, p. 114.
- (120) *Visita.*, p. 330, p. 333.
- (121) Murra, *Nova America, op. cit.*, pp. 234-235. /カシケの継承規定は厳格であったとは考えられないと、カレン・スボルディングも述べる。 Spalding, *Ph. D. dissertation, op. cit.*, pp. 176-177.
- (122) Flores, *op. cit.*, p. 333.

- (123) Capoche, *op. cit.*, p. 86, p. 92.
- (124) *Ibid.*, p. 136.
- (125) *Ibid.*, p. 101, p. 103.
- (126) Spalding, *HAHR, op. cit.*, p. 585.
- (127) 中川文雄「ボリビア農村史の基本的性格」(『ラテンアメリカ研究』9号, 1970年) 96-97 ページ. Cañete y Domínguez, *op. cit.*, p. 66. /Cobb, *Ph. D. dissertation, op. cit.*, pp. 78-80, pp. 97-98. /Kubler, *op. cit.*, p. 372, pp. 377-378. /Means, *op. cit.*, pp. 183-186. /Pereyra, *op. cit.*, pp. 12-13. /Purser, *op. cit.*, pp. 41-42. /Wiedner, *op. cit.*, pp. 368-370.
- (128) *Visita.*, p. 61.
- (129) Rowe, *HAHR, op. cit.*, p. 175.
- (130) ワロチリ地方の場合, 死亡したり, 逃亡したインディオの貢納税, ミタの負担は, カシケが肩代りせねばならなかったといわれる. Spalding, *Ph. D. dissertation, op. cit.*, pp. 204-205, p. 207.

『ラテンアメリカ研究年報』3号(1983) 正誤表

頁	行	誤	正
31	8	クフ	7つ
34	28	チェクイート	チュクイート
35	3	タフ	7つ
35	8	クフ	7つ
38	18	コレビドール	コレヒドール
39	7	会計	合計
39	17	政策の	政策を
42	1	関係であった,	関係であった.
42	12	クフ	7つ